国際学部の学生たち

田巻 松雄

国際学部は、2016年度入試より、特別入試として「外国人生徒入試」を導入した。外国籍で、日本国内で高等学校や中等教育学校もしくは外国人学校を卒業した(又は卒業見込)者を対象にした特別入試であり、国立大学では初めての試みである。

また、国際学部は、2017年4月より、従来の国際社会と国際文化の2学科から国際学科1学科の体制に生まれ変わった。学部教育の目標として「多文化共生に関する体系的な学び」を掲げ、「多文化共生」を実現するために必要な知識、関心・意欲そして行動力を備える21世紀型グローバル人材(グローカル人材)の育成を新たな目標と位置付けた。グローバル化する地域の現状と課題を多文化共生の視点から読み解き、問題の構造をふまえて社会を構想していく力を養うとともに、コミュニケーション能力や行動力を備え、外国語運用能力もある、グローバルな実践力を持った人材の育成、とも言いかえることが出来る。

このような国際学部に入学して来る学生たちは実に多様である。地元栃木県はもとより北海道から沖縄まで、全国各地から入学してくる。その中には帰国生、社会人、外国籍の児童生徒として日本の小中高で学んだ人、他大学等からの編入学者が含まれる。交換留学生を含む様々な外国人留学生も多く在学している。外国人生徒入試の導入はより多様な学生の入学に道を開いた。特に、外国学校の学生たちに国立大学への道を開いた意義はとても大きいと言えるだろう。外国人生徒入試を通じた入学者は5年間で15名を超えたが、ダイバーシティへの適応力を醸成する学習環境の充実に対して大きく貢献してきている。

ここに登場するのは、元外国人児童生徒たちである。外国人生徒入試で入学してきた学生もいれば推薦入試、編入学試験、さらには一般入試で入学してきた学生もいる。日本で生まれた学生も、学齢期に来日した学生も、学齢を超える年齢で来日した学生もいる。HANDSの多言語による高校進学ガイダンスに中学生の時に参加した学生もいれば、ガイダンスで高校進学を果たした先輩として体験談を語った体験を持つ学生もいる。HANDSに関わりたくて国際学部を目指した学生もいる。HANDSJr.に参加し、外国人児童生徒支援にかかっている学生もいる。そして、これからHANDSに関わろうと考えている学生もいる。

多文化・多言語的な児童生徒として、様々な意味で「外国人であること」、「外国につながっている」ことに向き合ってきた学生たちである。「HANDS10年史」の構想を練っている時に、ふと、かれらの体験談を発信できないかと考えた。授業やHANDSでかれらと接していると、どんな体験をしたのか、聞きたいことが山ほど出てくるのである。外国人であるかれらだけが特別な体験や苦労をしていると考えているわけではもちろんない。しかし、外国人児童生徒教育問題に関わってきた者として、かれらの体験から大いに学びたいと思っている。今回体験談を書いてもらったのは、授業やHANDSで知りあった学生たちに限られている。その他の学生とは新たな出会いを楽しみにしたい。

国際学部卒業生・在籍生17人のレポート

母国往来と自分で開拓した道

小波津 ホセ

来日動機

私は1984年にペルー共和国の首都リマ市で生まれ、8歳だった1992年2月3日に初来日しました。先に出稼ぎ者として来日した親の呼寄せによって日本での生活が始まりました。親は、日本での出稼ぎ以前にはアメリカ合衆国で出稼ぎをしていました。その間、そして初来日を果たすまで兄と私は日系人家族である母方の家に預けられ、日系人学校に通学する生活を送っていました。日本に対する知識は、日系人学校、日系社会やテレビ等のマスメディアでの限定的な情報であり、日系人であるとはいえ十分ではありませんでした。

日本語とスペイン語

ペルーで生まれ日系人家庭内で成長したとはいえ、親戚内に日本語に精通する人はいなく、日系人学校で勉強した日本語は平仮名の読み書き程度だったため日本語ができない状況で来日しました。逆に、スペイン語は母語であり、来日した当時は8歳程度のスペイン語能力がありました。日本語の本格的な習得は、日本の小学校への編入後からであり、原学級、国際教室そして家での自主学習が大きな役割を果たしました。また、当時の小学校や地域には他に外国人児童生徒がおらず、日本語漬けの毎日が小学校内外で強いられる状況で生活しました。国際教室への通級は最初の半年で、その後は限定的な時間へと減少しましたが、小学校卒業までは弱点(発音、文法等)に対する指導をその都度受けていました。中学校入学以降、日本語指導を受ける機会はなく、他の日本人生徒同様の扱いでした。

一方、スペイン語は8歳まで流暢に話し問題ありませんでした。来日後、スペイン語を話す相手は親と兄しかおらず、親は仕事、私は部活動という生活様式の異なる時間を家庭で過ごすことでスペイン語を使用する回数が徐々に減少しました。兄とは日本語習得後、周囲の視線もありスペイン語よりも日本語使用を好むようになり、家庭内であっても言語差異が生まれました。日本語使用率が増し、スペイン語は話す言語よりも聞く言語へと限定され、スペイン語能力の低下につながっていきました。実際、小学校3年生頃にはスペイン語能力が低下する自分を認識するほどでした。これ以降、ペルーへと長期帰国する21歳までスペイン語能力は低下していきました。今考えると、周囲にスペイン語を話す環境(支援、ペルー人不在)が欠如したことと日本語優先の環境が大きな要因だったと感じています。そのため、スペイン語能力の低下は親との会話不足につながっただけではなく、アイデンティティ喪失にも大きく影響した思います。大人になって、当時のスペイン語とアイデンティティ喪失は外国人児童生徒として学校生活への適応という点では積極的な効果をもたらした半面、自分の将来的な可能性を狭めた現象だったとも考えています。その点、成人後のペルーへの帰国はスペイン語能力とアイデンティティにおいて自分に大きな変化をもたらし、その後の生活にも影響したと感じています。

学校生活

学校生活において終始変化しなかったのは周囲からの視線でした。編入・入学当初、名前が呼称される度、また部活動の学外試合・遠征、友達と外出する度等には学校内外での視線を感じることが常でした。近年になってこの現状は変化しつつありますが、1990年代、2000年代には周囲の視線を浴びながら生活していました。このように感じ取っていた背景には、自分は周囲と「同じ」であると考えていたにもかかわらず友人・知人でない周囲から「異質」な存在として把握されていたことに原因がありました。日本語をある程度認識した小学校高学年(学習面でも困難は減少)から自分はペルー人よりも日本人という認識の方が強く、アイデンティティを失い同化が進んでいました。そのため、学校生活において周囲との同じ行動は当然であり、そうでなければ仲間外れにされる可能性が高いと感じ取っていました。それは、部活動でも同様でした。部活動が日本社会、日本語、学校生活への順応に重要な位置づけを占めたことは間違いないですが、日本的な集団行動を強化させたことも否めず、学校生活の中で欠かせない時間(集団行動や友人関係の強化)でした。ある程度学校生活に適応した結果、いじめや嫌がらせをされることはほとんどありませんでした。今になって振り返ると、私は周囲に同化することでペルーから日本社会に持ち込んだ「自分らしさ」を喪失して、成長することになりました。

周囲の支援

周囲の支援を強く感じたのは、小学校卒業するまででそれ以降は自助努力が大半を占めていたと思います。来日当初は、特に学校の先生のみならず周囲の友達からも学校生活における支援がありました。学校制度、教科指導や生活一般において学校内外で指導・支援を受けていました。ある程度の日本語習得後は、支援というよりも日本的な習慣・風習を熟知していない人に対する説明という形式に変化していきました。学校の先生は、私の知らないところで親への支援を継続していましたが、私が日本語を理解するようになってからは私を通して親へと伝達することが当然となり、私に対する負担が増えました。親が通常すべき手続きを日本語がわかる私が代わりにすることが当然となり、親の威厳・権限が低下していく要因となりました。

中学校以降は、自分自身で物事を判断することが親に説明するよりも早いという認識が芽生え、金銭が絡む重要なことでない限り自分で判断して学校に書類を提出することが増えていきました。私がある程度日本語を理解すると周囲の支援は極端に減少していき、周囲に迷惑をかけなくなりました。それは、自分への負担が増加することを意味して、親との関係を歪なものへと変化させていきました。歪とは、親は親ではあるが学校生活における主権は自分が握り、経済的な要件以外は親の必要性等がないことを意味していました。これは、親と距離をおくことを助長した経験であったとも今では感じています。もちろん、学校生活以外に親の職場における手続きや日常生活においても親から頼られる回数は徐々に増加していき、さらに負担になったことも否めず、親を「理解」するよりも「距離をとる」ことが当然の選択肢であるとも感じていました。

高校進学

高校は、市内の県立高校に一般入試(5教科入試)で進学しました。将来的な夢や目標があったから進学したわけではなく、理由は3つありました。周囲の友達に合わせたこと、部活動を優先したこと、そして他に選択肢がなかったからです。小学校と中学校から部活動でサッカー部に所属していたため友達が多く、学力的にもかれらと類似していました。そのため、日本人であるかれらと同じ高校に進学することが1つの目標で、「仲間外れ」になることを回避したかったのです。また、居住していた地域には工業団地はなく、中